はじめに

岩手県南部旧田村藩領内には、浄土宗寺院はない。にもかかわらず非常に念仏の盛んな地域である。その地域の一部では、百萬遍念仏が行われている。このほど、その百萬遍念仏の調査を行ったところ、江戸時代中期の祈祷念仏の影響を受けていることがわかったので報告する。

一　百萬遍念仏と利剣名号、宝珠名号

百萬遍念仏には、数珠と鉦（ふせがね）と数札が用いられるが、それが箱に納まり、さらにその本尊として利剣名号と宝珠名号[※1]が備えられていた[※2]。

箱の裏書きに、

宝珠及利剣名号者弘法大師之書法大我上人之模写……後略

とあり、明和四年（一七六七）の年号から、大我（一七〇九～一七八二）の書したものであることがわかる。

また、数札の左右に、

右側　「利剣名号断除三界厄難」
左側　「宝珠名号救済二世貧窮」

と記されている。

すなわち、百萬遍念仏が現世利益（りやく）の念仏として宝珠、利剣の名号を本尊に修されていたのである。

二　江戸中期における祈祷念仏論争

大我は、江戸時代中期における祈祷念仏論争の立役者であった。当時、鎮護国家という大命題のもと、祈祷念仏についての論争があったことは大橋俊雄氏[※3]や長谷川匡俊氏[※4]がすでに指

摘をしているとおりである。

長谷川氏によれば、次のようにまとめることができる。

まず祈祷念仏否定派として活躍したのが関通（一六九六～一七七〇）や法洲（一七六五～一八三九）らである。否定した根拠は現世への執着につながるというものであった。

これに対抗した現世利益の念仏（祈祷念仏）は次の三つに類型化されるとする。

（一）念仏祈祷説　大我

（二）現当両益説　徳本（一七五八～一八一六）

（三）祈祷方便説　慈光（『浄業問弁』宝暦三年、一七五三刊を著す）

徳本は、念仏さえ申していれば現世安穏、後生清浄土と言い、現当二世の両益を説く。

慈光の説は、「厭欣心の強い人は、自ずから往生のために念仏を称えるが、念仏の現益に触発されて念仏に励む人もいる。信心のきっかけはどうあれ念仏の道に導くことこそ弥陀の大悲を伝えるということになる」という説である。

百萬遍念仏に自説を託して広めようと試みたのは、長谷川氏が祈祷念仏論者と位置付けた大我である。

大我は『専修祈祷論』（寛延三年、一七五〇）を著し、さまざまに人間に降りかかる災いを

解析し、その原因から念仏の現益について、何が念仏で防げるのかということを詳細に検討している。

例えば、降りかかる災いについて、「子供を亡くす」「病気」「貧窮」「災難」「憎しみを受ける」を挙げ、それぞれの原因によって、念仏者の受ける利益を述べている。

ここでは詳細を引用することはできないが、このような解析のあとに、祈祷念仏の行法についても言及している。

まず、念仏によって増益祈願を修する場合は、宝珠名号をもって本尊とし、

和笑童声（ノヲ）専修念仏（スルコトキルニ）猶懐嬰兒美声（ニシテルカ）称阿阿（ト）是也

と言う。

また、降伏を祈るときは利剣名号を本尊とし、

暴怒雷聲（シテノヲ）専修念佛（スルキクニヲ）猶摧木石激声（シテスルカ）發叱叱（ト）是也

とする。

ここに、宝珠名号と利剣名号という本尊の形態の説明がなされている。これを具体的に展

開したのが、最初に述べた百萬遍念仏であり、名号の掛軸と数札に記された文句なのである。

すなわち、宝珠名号を本尊とし現当二世の貧窮救済を祈祷し、利剣名号を本尊とし三界の厄難を断除することを祈祷したことがわかる。

大我は、貧窮や災難に対してどのような考えを持っていたかと言えば、念仏の行者は常に聖衆の護念を蒙るがゆえに、障難すなわち暴風による難破、盗賊よる盗難や、過去世の業による業難や横難にあうことがないと考えていた。おそらく大我は、念仏の行者が常に聖衆の護念を得ることを、百萬遍の念仏に託して民衆の実践に当てたことが推測されるのである。

三　利剣と宝珠

利剣名号の出典については、すでに『浄土宗大辞典』などで取り上げられており、ここでは論述しないが、宝珠名号の出典について以下検討してみたい。

この利剣と宝珠という言葉の対照については、香誉祐海[※5]（一六八〇～一七六〇）が宝永二年（一七〇五）に述し、宝暦九年（一七五九）に再治している『愚蒙安心章』の「浄土宗祈祷の事」に

無上大利の宝珠あに往生の当益のみならんや、誠に三世円融の極風浄家に祈祷なしというわ近くいはば、御当家の元祖家康公先祖代々浄土宗にて深く念仏の安心を決定し、厭離穢土欣求浄土の籏をなひかせ大願強力の弥陀の利剣を以、天下の悪党を退治し、……後略

とあり、江戸の比較的早い時期から言われていたことがわかる。

ここで注目したいのが、「無上大利」という言葉である。ここでは明らかに現世利益を主張しており、宝珠という言葉の持つ意味を標榜していると考えられる。

「無上大利」と言えば、『選擇集』の念仏利益編[※6]に出るが、もっと宝珠と結び付いた文が『徹選擇本末口伝抄』下にある。[※7]

挙テ宝珠無量徳ノ合スル大乗ノ一多相入浅深無妨ニ

を説明する部分に、

名号是ハレ阿弥陀仏究竟仏果無上名号也大利ノ功徳也

のように出る。このようなことから、宝珠の無上の名号、大利の功徳を持つということが説明されるのであろう。

四　宝珠名号の出典と機能について

名号の変体について詳述しているものに、文雄（一七〇〇～一七六三）の『利剣名号折伏鈔』[※8]（寛保二年、一七四二）がある。これによると、名号を書くにあたって、種々変体のあることを明かす。具体的に、利剣、宝珠、蓮華、名体不離等という。

名号を利剣に書く意味は、「諸魔の障礙を攘ひ疫神等の災厄を除かん為なり」と言い、宝珠名号について次のように述べる。

> 宝珠名号とは、字々皆団形にして宝珠の形なり、念仏三昧経に云、念仏三昧は一切諸佛の財宝なり、一切諸佛の舎利なりと、徹選択下に云、念仏三昧を以て如意宝珠に喩ふ、乃至一切衆生をして罪を滅して往生せしむ、豈に珠の力用にあらずやと、論註に云、譬へば、浄摩尼珠を濁水に置けば水清浄なるが如し、もし人無

量生死の罪濁ありといへども、彼の阿弥陀如来の至極無生清浄宝珠の名号を聞て、これを濁水に投ずれば、念々の中に罪滅して往生することを得と。

また、それぞれの変体を書する目的を次のように述べる。

元より万徳所帰の名号なれば、各一徳を挙て書き表さんに、名号の形貌もまた無量ならん、今姑く三五を示すのみ、此護持宝印の如き、二世の所求を満足すれば宝珠の用あり、煩悩の濁に染まぬ妙法なれば蓮華の徳あり、名に即する仏体なれば名体不離の益あり、今正く降伏妖邪の相を顕して利剣形を用ひたり

などと言う。

文雄によれば、宝珠名号も万徳のうちの一徳を表すものであり、その意図するところは二世の所求を満足させることにある。その力は滅罪往生という宝珠の機能にある。

『論註』の宝珠名号の譬えは、下下品の人が十念に乗じて往生するのは、無生の生ではなく実の生であるという誤った考えを持つのではないかという問いを破すところに譬えとして出てくるが[※9]、阿弥陀如来の名号の徳を宝珠に譬えているのである。その内容は文雄の引用するとおりであるが、『論註』では、さらに阿弥陀如来の無上の宝珠を無量の荘厳功徳成就の幡

でくるんで往生する者の心の水に投げ入れれば、邪見を転じて智となすことができるという比喩が続き、宝珠によって、凡夫の心が如来の功徳により熏習される効果のあることを明かしている。

五　宝珠名号と現世利益

文雄の諸説と『論註』から、読み取れる宝珠名号の現世利益は滅罪と熏習的効果ということが言えよう。滅罪については、『観念法門』[※10]や『往生要集』[※11]に示される念仏の現益の重要な要素でもあり、浄土教における現世利益の中心になる機能である。

しかしながら、大我の求める宝珠名号の機能は、さらに進んで「救済二世貧窮」であることを前に述べた。これについて明確な論理を大我自身も立てていないので推論にすぎないが『安楽集』の次の比喩表現[※12]に注目したい。

如下賤貧人獲二一瑞物一而以貢レ王王慶二所得一加二諸重賞一斯須之頃富盈レ望豈可レ得レ言丙以下数十年仕備尽二辛勤一上下尚不レ達而帰者上言二彼富貴一無乙此事甲也

今、円諦の『安楽集纂釈』[※13]に従って解釈を加えれば、「もし、貧乏な人がいて、瑞物（すなわちこれを無上の宝珠とし、念仏に譬える）を得て、王（弥陀）に献上すれば、王（弥陀）それを喜んで、すぐに望みの富を与える（仏、念をかえして弾指の間に往生を得る）であろう。数十年辛い勤めに耐えてもなお富を得ず帰る者もいるであろうに（自力難証の道に進み引き返す者もいるのに）」ということになる。

これは、第二大門中の、衆生が煩悩を断ぜずして往生できる理由を問う問答の一部であるが、念仏を宝珠に譬えて、無上の功徳のあることを表しており、比喩表現ではあるが、貧窮を救済することを表現している。『安楽集』では、この比喩表現のすぐあとに先の『論註』の宝珠名号の記述が引かれていることもあり[※14]、大我の思想の根底にはこの比喩表現があったことが憶測されるのである。

六　法蔵菩薩の誓願と現世利益

また、最初の数札の文句に戻るが、貧窮と厄難と言えば、『無量寿経』の「四誓偈」[※15]に出る法蔵菩薩の誓願としての救済と直接結び付いた言葉と解釈することができる。

事実、大我は『専修祈祷論』の巻末に利剣名号と宝珠名号を掲げ、前者に

神力演大光普照無際土消除三垢冥広済衆厄難

後者に

我於無量劫不為大施主普済諸貧苦誓不成正覚

と添え書きしている。

大我は、宝珠の名号の滅罪の機能よりも直接的に宝という感覚を大事にして貧窮を済(すく)わんとし、利剣名号の剣というイメージにより厄難を断除せんことを託し、法蔵菩薩の成就された誓願に乗せて、念仏の功徳を説き実践させようとしたことがうかがえるのである。

すなわち、難しい経論解釈を重視するよりも、根底には論拠を持ちながら、民衆の実践のためにより直感的に受け入れられるものとして、利剣と宝珠の名号を本尊としたのではないかと推測されるのである。

そして、さまざまな祈祷的要素（大我の挙げるところによれば、息災・増益・敬愛・降伏など）[※16]から救済貧窮と断除厄難をそれぞれ宝珠と利剣名号に託したのは、それが法蔵菩薩の

誓願と直接結び付いているからではないかと考えることができる。

おわりに

今回紹介したように、祈祷目的で製作された百萬遍念仏の数珠が、利剣および宝珠の名号とともに現在まで受け継がれていることは、民衆への受け入れやすさという観点を重視した大我らの功績であることは間違いない。時代を経るに従って現世利益的意味付けは失われ、故人の冥福を祈る形に変化しており、習慣化しているものであるが、導入に当たっては当時としても現世利益性が要求されたことは十分考えられることであり、評価できる事象と言えるであろう。

註

※1　利剣名号（右）と宝珠名号（左）

※2　この百萬遍念仏数珠の完全な組は、岩手県西磐井郡千厩町伊藤一氏によって伝えられている。

※3　日本仏教研究会『日本宗教の現世利益』（大蔵出版、昭和四十五年、一一九～一二六頁）

※4　長谷川匡俊『近世念仏者集団の行動と思想』（評論社、昭和五十五年、一二六～一三七頁）

※5　祐天寺起立、『愚蒙安心章』は祐天寺蔵。

※6　『浄全』七、二八頁

※7　聖聡講述、『浄全』七、一六〇頁

※8　『「広疑瑞決集」「利剣名号折伏抄」』合巻（大正三年、一五九頁）

※9　『浄全』一、二四五頁下～二四六頁上

※10　『浄全』四、二二七頁。「滅罪増上縁」「御念得長命増上縁」「見仏増上縁」「摂生増上縁」「證生増上縁」を挙げる。

※11　『浄全』十五、一一七頁。「滅罪生善」「冥得護持」「現身見仏」「当来勝利」「弥陀別益」「引例勧信」「悪趣利益」を挙げる。

※12　『浄全』一、六八六頁

※13　『続浄』六、二〇六頁。円諦は明和年間の人と解題（二四頁）にある。

※14　『浄全』一、六八九頁

※15　『浄全』一、一一頁

※16　『専修祈祷論』に出る。